NANZAN
UNIVERSITY

2014 年度学長方針

南山大学の皆さん

学長　ミカエル・カルマノ

I. 基本姿勢

成長としての教育

過去の学長方針では、南山の教育の根源と基本的目的について話をするために、神言会のキーフレーズを出発点、枠組みとして用いてきました。今年は新約聖書のなかのイエスが語ったたとえ話を用いますが、はじめにアメリカの哲学者ジョン・デューイの著作を引用したいと思います。彼は成長というイメージを用いて教育とは何かを説明しています。

「教育の過程はそれ自体を越えるいかなる目的ももっていない、すなわち、それはそれ自体の目的なのだ」(Dewey 1916 “Democracy and Education”)。言い換えれば、生きている間に学びつづけることを可能にするのが、教育の目的だということです。教育によっていい仕事やよき配偶者と巡り会うこともありますが、教育それ自体は、学ぶ人間にとって不可欠な内面的目的に向かって成長しつづけることにほかなりません。教育が、特定の訓練プログラムという形で、学ぶ者の内面的成長に結びついた目的を結果的に達成する一助になることを否定しているわけではありません。しかし、トラが輪の中を跳んでくぐることは、それを見ている人々にとっては楽しいけれども、必ずしもトラ自身の成長にプラスになるとは限りません。

南山の教育は、当初から、グローバルな競合時代における社会の一時的なニーズではなく、学習者の人格を中心に据えてきました。南山の教育の要締を表すモットーは、「人間の尊厳のために（Hominis Dignitati)」であり、この言葉はキリスト教の原典である聖書においてはさらなる広がりと深みを有しています。人間の成長の目的は、創造主からの賜物として描かれています。我々は、その賜物、すなわち意味ある人生の方向を示す導きを、自分自身の中に見出すことを求められています。

人間の内なる導きという賜物と、それを用いることとの結びつきは、「タラント(talents)」というよく知られたたとえ話に記されています（マタイ 25 章)。我々は与えられた「才能」を用いていますが、我々自身の個人的利得のために働いているわけではありません。実際我々は、自分が十分理解していない目的に寄与していることさえありえます。このことはカトリックの高等教育機関としての南山大学にとって、重要な意味合いを含んでいると思われます。学生と教員の才能を信じることから、教育上の努力が始まります。全ての人間

が有する尊厳という神からの賜物を信じること、人間はみな成長することができるという信念は、学生と教員の間で同様に共有されています。しかしビジョンを現実のものとするためにはまた、良質な訓練が必要ですし、人間社会が培ってきた他のあらゆる知的スキルが必要とされます。

「あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。」（ルカ 14 章）。自分の才能を見出したのならば、それを適切に用いて社会に意味のある貢献をする必要があります。けれども、この地球上で生きていく上での目的を見失ってはなりません。その目的とは、何が最も重要なのかを知識として持ちつつ成長するということです。この知識についてイエスが語るのに用いたのは、「神の国」というイメージです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（マタイ 6 章）。

学生の内面的成長を導き、そして彼らが社会に寄与する能力を高めるために必要な教育環境はどのようなものでしょうか。ルカによる福音書（13 章）に出てくるイチジクの木のたとえ話は、効果的教育方法の選択に関することではありませんが、神の教育プログラムと呼べるようなもののイメージを与えてくれると思われます。そこでは土地を用意することが強調されています。「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます」。

南山大学の教育に担ってほしいのは豊かな土壌としての役割です。人間として成長するのに必要な内なる目的と方向性を、学生が自分自身のなかに見出す（そして育む）助けとなることが望まれます。肥やしをやり、豊かな土壌を作ることによって、南山の教育は学生の成長に大きな影響を与えることができます。アジサイは土壌の酸性の度合いによって色が変わるといわれています。南山ブルー（ロゴに使われている青色）に全ての学生を染めたいということではありません。カリキュラムを通じて与えられる栄養によって、学生がそれぞれの色を生み出せるということを心に留めておかなくてはなりません。

これから数年の計画は、キャンパス統合を成功させるためにあります。「One Campus, Many Skills」は、この野心的な事業の意図を表すメッセージです。「One Campus」は、学生があらゆる種類の土壌に根を張り巡らせる環境を提供することを、「Many Skills」は、南山が提供するカリキュラムが、学生それぞれの個人的成長に寄与し、今日のグローバル社会における全ての人々のニーズに真に応えることを示しています。

II. 最重要課題

1. 南山の教育における共通の核の強化と発展

まず南山の教育の核として共有されうるものを強化・発展させていくことを呼びかけたいと思います。各学部・学科における専門教育で行われている教育内容から、全学において共有されうるもの、および学部・学科の垣根を越えて連携しうるものの検討をお願いします。たとえば、理工学部が名古屋キャンパスに移転されるこの際に、情報倫理教育を共通教育科目の中で提供することや自然科学系の共通教育を強化することなどが考えられます。全学生に、英語の運用能力を高め、二つ目の外国語を使えるレベルまで学ぶ機会を提供できないでしょうか。現在名古屋キャンパスと瀬戸キャンパスで分かれている共通教育科目のカリキュラムは 2015 年度から一本化するよう、現在両キャンパスの共通教育委員会が検討を進めていますが、これを契機として教育の核の強化・発展に向けたさらなる検討をお願いします。

また南山の教育の枠組みという点についていえば、学生個々人の学習環境を向上させるには、学年暦の再検討を避けて通ることができません。その中心はクォーター制の導入です。これは研究環境の充実にも資するでしょう。ぜひキャンパス統合の最終段階である 2017 年度の開始を目指して、教務委員会や学生部を中心に具体的な準備段階に入ってください。

2. 「絶えざる自己改革」と学部改組

次に南山大学への潜在的な進学者の希望に応えるために、学部・学科の実現可能な将来性のあるかたちを根本から考えていくことを広く構成員に呼びかけ、そうした意見をもとに方針を決めていきたいと思います。外国語学部は、定められた大枠に従い、より魅力的な学部となるように改組具体策の検討をお願いします。短期大学部は、社会からのニーズの変化に対応し、これまでの本学における英米学科の地域研究や言語学といった教育分野を補完するような方向への発展的解消を行う方向で具体策の検討を行うようお願いします。たとえば、仕事に使える外国語を身につけたいという学生の希望は大きいように思われます。既存の学部においても学部の中でより魅力的な学科やコースの体制の検討をお願いします。学生の選択の幅を広げるような学部・学科のありかたを踏まえて、定員の再配置についても引き続き検討してください。

3. 学生と教職員とキャンパスのグローバル化

今年度も引き続きグローバル化は重要な課題です。具体的には、まず海外派遣と受け入れの両面から留学プログラムをさらに多様化する必要があります。外国語学部だけではなく他学部から留学する学生を増やすこと、また現在総合政策学部で行っている日本語未修の留学生の受け入れを他学部でも展開することを検討していきます。別科の学生や短期招

聘の教職員や研究者の受け入れ態勢の充実のためにはハウジングの問題に対するサポートも検討しなければなりません。

次に拠点となる国際センターについては、2017 年度から始動できるよう設置準備委員会で準備を進めていってください。さらに今年度で 3 年目になる国際科目群については、引き続き科目および担当教員を質・量ともに充実させていきます。また、英語以外のクラスの開講や別科生や短期で滞在する留学生が受講できるようにより柔軟な運用を進めていくことが望まれます。そのためクォーター制と連動させる検討が必要です。またこうした学生とキャンパスのグローバル化に資するため、教職員のスキルアップも重要です。

III. 将来構想

1. キャンパス整備

キャンパスの統合に伴って、各学部・学科から意見を集めキャンパスの整備を推し進めていく必要があります。このために、将来構想担当副学長と協力してキャンパス統合に伴う組織の改編やキャンパスの整備についての実務的な業務を行う将来構想推進室を設置しました。名古屋キャンパスはレーモンド設計を受け継いで全体像と整合する形で、適切な予算の中で、さまざまな条件を総合的に考慮しながらキャンパス整備を行っていって欲しいと思います。今年度理工学部移転に向けて新棟が完成しますが、2017 年度の総合政策学部の移転に合わせ、将来構想委員会を中心にキャンパス整備計画を策定します。

また学生や教職員が快適に過ごせるキャンパスにするために、キャンパス全体計画の中で、既存の設備についても必要に応じて順次改修していきます。たとえば、大学で学習に用いる情報通信機器は、それぞれの学生が使い慣れたものを使用できるようにするのが良いのではないでしょうか。こうした情報通信機器が本学で学習に用いられるような環境の整備をお願いいたします。さらに、今後も使われる予定の古くからある棟の一部の教室の環境からトイレの設備に至るまで、より機能的なものにしていくことが望まれます。また交流会館、ロゴスセンターの将来計画も検討していきます。

2. 情報センターと国際センター

キャンパス統合に際しては、情報センターと、国際センターが新たに設置されます。

情報センターは、情報環境の整備が大学にとって重要な課題である今日において、とりわけその整備が十分でない名古屋キャンパスにとって不可欠です。これは 2012 年度の南山大学外部評価委員会においてもその設置が提言されていました。この情報センターは、2015 年度の理工学部の移転に間に合うように、情報センター設置準備委員会のもと準備を進め

ていってください。これとともに、昨年度、情報センター設置ワーキンググループで検討してきた、情報環境ポリシーを策定し、それに従って、情報環境を整備し、全学生向けの情報倫理教育の準備も進めていかなくてはなりません。

国際センターは、留学の支援を任務の中心とする現在の国際教育センターを強化・拡大して、より広く国際的な教育および研究の支援をその任務とします。同センターは大学の教育・研究両面における国際化を進めていくための拠点となる組織として位置付けられるものです。国際化推進本部の報告書「国際センター設立について」に基づき組織された準備委員会において、設置のための準備を進めてください。

3. 社会のニーズに応えた大学院教育

日本の大学院における教育は、主に研究者養成のためのものでしたが、現在では社会に出た人々に体系的な思考法や方法論、および既存の学問分野をまたぐ知を教示することも求められています。社会では既存の学問分野にとらわれないテーマも評価されることを念頭に、大学の中での役割と社会における貢献の役割を検討するようお願いします。多様な学生の受け入れを目指し、社会人のさらなる受け入れを図るためには、昼間に授業を開講する大学院のみならず、社会人の入学者にとってより魅力的な学習環境を提供していくことも望まれます。昨年度設置した理工学研究科博士前期課程および今年度設置した社会科学研究科でも、積極的な社会人の受け入れをお願いします。

2015 年度には、理工学研究科博士後期課程を設置します。南山大学グランドデザインの改革テーマのひとつに学問領域の幅の拡大を掲げておりますが、今後もモノづくりの拠点である中部地区のニーズに応えて、総合大学としてより魅力的な教育研究を行える大学院教育の充実を目指します。

なお、専門職大学院であるビジネス研究科ビジネス専攻および法務研究科についても、今後の在り方について長期的な視点から注意深く検討します。

IV. 教育・研究

1. 学士課程における外国語教育の役割

外国語を単に学ぶだけでなく、学ぶために外国語を用いることは重要です。3 年目の取り組みとなる国際科目群では、外国語で授業が行われますが、通常の語学を学ぶことが目的ではなく、外国語を通した新しい視点からの学びができるようになることも期待しています。このことは日本語のみで教養科目や専門科目を学ぶよりも、各学生の個人的な成長につながることと思います。

南山大学に入学した学生は、英語が使えるようになることはもちろん、二つ目の外国語を使えるようになって欲しいと思います。第二外国語を使えるレベルまで学ぶというのは学生たちにとっても意欲的な目標であるでしょう。しかし、第二外国語を通した学びによって、自分の国を外から見ることは、必ずや学生の成長につながります。それを支えるために外国語の教育を行うための組織について検討してください。

教員は外国語の知識を持っていることや国際的に通用する研究を行っていることで、南山大学の学生の教育に大きく貢献することになります。サン・カルロス大学との教員交換プログラムなど、カトリック系大学をはじめとする海外諸大学との連携もさらに強化していってほしいと願っています。教員・大学院生の国際会議への参加も積極的に行ってください。また英語のみで修了できるプログラムについて、まずは大学院レベルで検討してください。

2. 情報化と授業形式の改善

ICT（Information and Communication Technology）の発展により、授業や課題をより魅力的にするために今までと違ったアプローチが取れるようになりました。たとえば、e-ラーニングシステムを用いて授業時間中にとったアンケートに即座にフィードバックする授業が行われています。また、録画された講義を学生が事前に視聴して、教室ではその議論を行うことも可能になっています。今後情報センターの設置とあわせたインターネット環境や e-ラーニング環境の整備により、学生たちは使い慣れた情報機器端末を用いて大学での学習を行う環境がますます整っていくことが予想されます。こうした環境の整備を授業にも反映させ、これらを活用して授業の改善に役立ててください。

今年度から図書館で学術機関リポジトリの運用が開始されます。各研究所・研究センターで雑誌・紀要や報告書などの電子化が進められてきましたが、南山学会のアカデミアも昨年度から電子化・公開を原則としています。電子的な刊行物は物理的なスペースを取らず、製本作業が不要なことから予算の削減にもつながります。これからも各種資料を電子化し、さらにリポジトリの整備を進めていきます。また図書館の蔵書運用体制を他大学と連携し改善していくよう検討を続けていきます。

3. 他大学との協働プログラム

他大学との連携や協働プログラムを今後も推し進めていくことを期待しています。たとえば、昨年度、南山大学・豊田工業大学連携 10 周年記念講演会が行われ、「グローバル時代の大学連携」と題したセッションで学長対談も行われました。これまで、学部教育では単位互換や図書館の相互利用が行われてきました。これらは、相互の大学にとって補完的

なものであり、先方からも抵抗感がなく受け取られている取り組みではないかと思います。今後まずは共通教育科目における取り組みを改善します。研究レベルでも、理工学研究科と豊田工業大学の共同研究の推進を考えてください。

南山大学と南山大学短期大学部はともに、愛知学長懇話会の「単位互換に関する包括協定」に参加しています。協定加盟大学の学生ならだれでも各大学が提供する科目を受講し単位取得をすることが可能になっています。

南山大学にとって、国内外のカトリック系大学との関係を強化していくことは重要です。現在、フィリピン共和国のサン・カルロス大学と教員交換プログラムを実施しており、大韓民国の韓南（ハンナン）大学、西江（ソガン）大学校と本学の法学部・法務研究科は学生交流・学術交流を実施しております。東南・東アジアカトリック大学連盟（ASEACCU）会議には、毎年、本学の学生や教職員が参加しております。国内では、上智大学と上南戦など様々なかたちでの協働を行っております。今後も、国内外のカトリック大学との連携の強化を各学部・大学院で積極的に検討してください。また、世界各国の大学間連携を目的の一つとする国連アカデミック・インパクトのプログラム参加大学として、学生間ネットワーク“ASPIRE”を通じた学生の活動を支援し、世界のリーダー育成に向け積極的に取り組んでいってください。

4. 科学研究費等の積極的獲得

南山大学が研究機関としても優れた大学であるためには構成員の皆さんの優れた研究成果が欠かせません。その実現のために、今年度も引き続き科学研究費等の外部資金の獲得に積極的に取り組んでください。科学研究費の申請数・採択数・交付額が増加しているなど、これまでにも一定の成果が表れていますが、現状に甘んずることなく、今年度も原則としてすべての構成員が何らかの形で外部資金の獲得に向けて積極的に取り組んでください。その際には、科学研究費だけでなく様々な可能性を広く検討してください。

また、研究・教育の強化推進のための各種助成金獲得のため、積極的に申請を行うことが求められます。学部・研究科をはじめとする学内各関係単位で申請の可能性を検討してください。そのためには申請に関わる学内の支援体制や獲得した教員の負担の軽減を図ることなどを検討する必要があります。たとえば、科学研究費助成事業応募にかかる申請書類の一部を希望者に閲覧できるようにしたり、申請書類の作成に関して講習会を開催したりしてきました。科学研究費等申請者に対してパッヘ研究奨励金 I-A(特定研究助成)の申請方法を簡略化したり、科学研究費使用の事務手続きを簡素化したり、事務的書類を教育・研究支援事務室がチェックすることをしてきましたが、これらの点で外部資金獲得者の間接業務の負担を軽減することで、引き続きより積極的に外部資金の申請を支援します。

5. 「絶えざる自己改革」のために

自己点検・評価委員会の下にピア・レビュー委員会が設置されて 3 年目になります。具体的で詳細な議論に基づき機動的な意思決定を行う同委員会には、きめ細かい評価とそれに基づいた改善提案をなすことが期待されています。本学が進化する社会のニーズに応え、教育･研究活動等の質を保ち続けるため､｢絶えざる自己改革｣を行っていくにあたり､PDCA サイクルは有用なツールです。教育目標、学生の受け入れ方針、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性を検証することも含め、各学部・学科・研究科においても PDCA サイクルを円滑にまわすための運営のあり方について引き続き検討をしてください。

6. 学生支援の充実

今日、大学において、就職支援をはじめとする学生支援はますます重要なものとなっています。学生支援には様々な形がありますが、身体的、精神的な障がいを持っている学生への支援も、「人間の尊厳のために」とのモットーを持つ南山大学にとって重要です。こうした学生を積極的に受け入れていくため、教務課および学生部と協力して、各学部・学科においてサポートを進めていってください。

近年の経済状況の悪化や予期せぬ災害・事故などに見舞われることによって、経済的事情が理由で退学を余儀なくされようとしている学生に対しては、家計所得への依存を低減して教育機会を均等化する観点から、的確な支援が必要です。たとえば、本学では、東日本大震災に伴う特例措置として、2013 年度に引き続き 2014 年度も入学検定料や学生納入金を最大で全額免除しています。今年度も、勉学に対する意欲があり成果を残してきているような学生たちに夢を追い続けてもらいさらにそれを奨励するためには、割り当てられた予算の中で適切な奨学金や支援情報を需要に応じて提供していくことが重要です。

その他にも、留学生支援、教職センターによる教職を目指す学生の支援、卒業生や在学生による就職支援、TA 制度など、これまで行ってきた学生支援をさらに充実させるよう期待しています。

V. 社会貢献と連携

1. 社会貢献

今後、少子化の一方で、社会人を対象とする教育の需要は高まっていくことが予想されます。南山エクステンション・カレッジは、特に地域の方のこうした需要に応える機関として、さらなる充実を図っていきます。

また昨年度は、人類学博物館がリニューアルオープンをしました。また明治大学博物館と名古屋市博物館との合同企画を行い、名古屋大学博物館とも協定を結びました。人類学博物館は展示品を手に取り、間近に感じることのできる希少なユニバーサル・ミュージアムであり、今後も様々な魅力的な企画を行い、開かれた博物館として学外の諸機関とのさらなる連携を進めていきます。

2. 産学官連携

今年度も東海地区の企業との間の連携による研究および教育の改善プログラムを進めていきます。これは、東海地区の産業界の人材ニーズを確認し、本学がこの地域の人材を育成する大学としての役割を果たしていくうえでも、重要です。具体的には、これまで他大学や企業、国、地方自治体、公益財団法人などからの受託研究や委託研究が行われてきました。また、大学コンソーシアムせとでは、瀬戸市と南山大学を含む近隣大学が協働した活動を行っています。これらを継続しつつ、新たな連携を他の企業だけでなく行政機関との間でも模索していきます。

3. 災害時の危機管理体制の整備

災害時において学生や教職員の安全を確保するため、危機管理体制の整備を継続する必要があります。また学生が事故を起こした際の規程の整備も進めていきます。これに加えて、災害時において大学が地域のなかで役割を果たすことも重要な社会貢献の一つです。地域に根ざした総合大学として本学の役割は小さくありません。今後も地域を含めた危機管理対策を考え、地域社会との連携を進めていきます。

VI. 入試・就職

1. 入試

2014 年度の一般入試、全学統一入試（個別学力試験型、センター併用型）、センター利用入試（前期 3 教科型・5 教科型、後期）をあわせた延べ志願者数は、昨年度の 24,197 名に比べて 995 名減の 23,202 名でした。今後も 18 歳人口は減少しつづけ、学生募集はますますその厳しさを増すことでしょう。こうした状況を踏まえて、適正な対応を取り続けることが必要です。志願者を確保し、そのレベルを維持し向上させるために、最も必要なのは各学部・学科での魅力的なプログラムであることを忘れてはならないと思います。学部・学科の改組改編は何よりもこのことを念頭において行われなければならないことは言うまでもありませんが、近い将来の改組が予定されていない学部・学科においても、魅力的な

プログラムを実現するため現行のカリキュラムの見直しを行っていく必要があります。これには、新しい科目をたてることに加えて、たとえば順序立てた履修を導くことなども考えられます。

その一方で入試業務の負担の軽減も進めていかなければなりません。一部の教職員への負担が過重なものとなっています。業務の質を保ちながら効率化、合理化を図っていきます。また入試に関連して、多様な学生の受け入れについて、今後より多くの社会人大学院生や外国人留学生を受け入れていくことも求められます。そのためのユニバーサル受け入れ体制の構築が必要です。

2. 就職

2013 年度は、大卒有効求人倍率は前年度とほぼ同じであり、景気の回復が報じられましたが、就職状況の大幅な改善には至りませんでした。本年度も引き続き内定率 100%を目指して、努力してください。そのために、キャリアサポート委員会や就職委員会を中心に、教職センターや南山エクステンション・カレッジ委員会、各学部・学科との連携を進めて、さらに充実した就職支援体制を築いていきます。たとえば、今年度から卒業生によるキャリア・アドバイザー制度を立ち上げました。キャリア・カウンセラーは学生相談を通じて一定の成果を上げていますが、その拡充などが考えられます。また 2016 年 3 月卒業予定者から就職活動の時期が変更されますが、これへの対応を検討してください。さらにキャンパス統合に合わせたキャリア支援体制の整備も今後の課題です。

これらの支援に先立って、南山大学は「人間の尊厳」を中心とした教育によって、学生の成長を促すことが重要なのは言うまでもありません。充実した就職支援体制の整備とともに、学生が自主性を養うことができるような環境を整えていくことも期待しています。いわゆる就職活動が始まるよりも前の時点から、各学部における講義や課外活動において大学生に求められる主体性・コミュニケーション能力・考える力を養う環境が提供されているようお願いします。

VII. 広報

これまでの広報に加えて、Facebook や YouTube、スマートフォンアプリなどを活用した新しい広報の手段があります。多様な媒体を通じた戦略的な広報を進めていってください。

Web ページについては、戦略的な広報の観点から各学部・学科の Web ページを適切に活用することを検討してください。またインターネット上の外国語のサイトに広告を試みることも考えられるのではないでしょうか。さらに、海外を含めた同窓会や後援会との連携

を強化していくことも望まれます。

　こうした広報活動には構成員一人ひとりの平時の努力が欠かせません。学生の安定的な確保やさらなる外部資金の獲得、寄附金の受け入れなどの成果を上げるためにも広報活動は重要な要素となります。